

音の散歩路

～東海道“響”を訪ねて川崎から小田原へ～



川崎駅から京浜急行大師線に乗り換えて三つ目の駅が川崎大師である。週末でもない十時すぎの観光地はまだ眠っている（写真－1）。参道を五、六分歩くと川崎大師平間寺の大山門が見えてくる（写真－2）。仲見世通りにはダルマを売る店（写真－3）や名物の咳止め飴を売る店が軒を連ね、ハタキをパタパタ、水を打ったりと忙しい。試食をすすめる店もチラホラある。この飴を切るトントコトントコという音が日本の音風景百選に選ばれているのであるが、早い時間のせいかわかなくてこない。歩くうち何か聞こえてきたなとその方向に視線を向けると、デモ用ロボットの人形夫婦が愛嬌ペイント顔をニコッと向けてぎこちなく、コト♪コト♪と包丁でまな板をたたいているのであった。百選の音風景が出現するのは催事があるときだけなのであろう。大本堂を正面に境内を散策すると、脇の方に女神と一緒に天女がラッパやシンバル、豎琴を鳴らす「祈りと平和の像」や鐘楼

堂がある。（写真－4）音風景では肩すかしを食ってしまったが、ひるまず大師の近所にある中国式山水庭園の瀟秀園に立ち寄ってみる。川



写真－2



写真－1



写真－3



写真-4



写真-5



写真-6

崎市との友好都市提携五周年を記念して瀋陽市から贈られ昭和62年に完成した（写真-5）。こじんまりとした竹まいではあるが本格的なものでなかなか見事。萎えた心は急速に中国気分になり、木立の奥の涼やかな滝音が回遊の伴奏をつけてくれる。ところで、川崎大師では毎年7月中旬に開催される風鈴市が有名である。そして、風鈴の中でも名高いのが小田原風鈴、そこで、川崎から東海道線で一時間とちょっとの小田原まで足を延ばすことにする。

駅に着けば、すっかりモダンな駅舎に変身して巨大な小田原提灯がぶら下がっている。小田原は戦国大名である北条氏の歴史が色濃い城下町である。新幹線の窓からはほんの少し天主閣

が見える程度の小田原城であるが、訪れてみると濠をめぐらせた勇壮な城址であった（写真-6）。昭和35年に復興された天守閣に登れば、思わぬ強風にたじろぎつつ秀吉一夜城築城の山を眺めることもできる（写真-7）。天守を降りて御茶壺橋を渡り城下に出る。御茶壺橋は邪魔をすれば即首が飛ぶので、茶壺に追われて戸をぴっしょん♪の御茶壺道中一行が入城する際に渡ったという橋である。城下を散策すると不意に鐘楼や、昔の商家を整備したお休み処が現れる（写真-8）。市立三の丸小学校もお城の一部の様で面白い（写真-9）。鐘楼は時の鐘で今でも朝夕の6時に撞かれている。江戸時代の1686年の記録によれば、昼夜の隔てなく撞か



写真-7



写真-8



写真-9

れて、鐘つきの給金は年六両であったという。鐘自体は戦争時の「時鐘応召」で軍需資材となってしまう昭和28年に新たに作られたもの。さて、お城から街中を歩くこと十五分、今でも小田原風鈴を製作している柏木美術鋳物研究所を訪れる（写真-10）。室町時代からの伝統を受け継ぐ鋳物工房である。併設の展示室には風鈴、呼鈴、仏鈴をはじめとしていろいろな鳴り物が展示販売されている（写真-11、表紙の写真）。鋳物は江戸時代には鉄砲や鍋、釜まで使われ最



写真-10



写真-11



も盛んであった。夜中に起きて仕事にかかる
と、炉の炎が夜空に反映して大磯や平塚からも火事
の様に見えたと言われている。小田原～平塚
間は約22キロもある。今はこの研究所だけが残
った。砂張（さはり）と呼ばれる銅に錫を混ぜ
た合金でできた風鈴は、一瞬万華鏡の様な響を
放射した後、ゆるやかな唸りをともなって澄み
渡って伸びる余韻に心が奪われる。砂張は響銅
とも呼ばれる繊細な合金であり、薄く仕上げな
ければならぬ鳴り物は落とすと割れてしま

う。映画「赤ひげ」の中で風鈴を使うシーンが
あり、黒澤明監督が「この音じゃない」とダメ
押しの結果、スタッフがたどりついたのがここ
の風鈴であった。国会議事堂の参議院議場で議
会開始時に鳴らされる振鈴もこの研究所が製
作したもの。シンバルも15年前までは国内ト
ップの生産量を誇り、広く輸出されていた。今
では忘れたように置かれている。時代が置き忘
れたような研究所であるが、時代の流れにも淘
汰されない何ものが“響”に込められている



写真-12

のであろう。

その他、小田原は童謡にまつわる場所でもある。郊外の荻窪用水には「めだかの学校」がある（写真-12）。童謡「めだかの学校」は童話作家の茶木滋さんが昭和25年にNHKの依頼を受けて創作した。終戦当時この荻窪用水付近で息子さんと買い出し途中に交わした会話に着想を得たという。もうひとつは北原白秋所縁の地であることだ。白秋は児童雑誌「赤い鳥」に童謡の担当者として参加した直後の33歳の時小田原に自宅をかまえた。それから8年余にわたり滞在して才能を開花させた。生涯に創作した1200編の童謡作品の半分を小田原で生み、その他の詞も多くは小田原を回想して詠まれたという。「からたちの花」「ちんちん千鳥」「ペチカ」「この道」「待ちぼうけ」「砂山」などなど小田原で生まれている。白秋記念館には直筆原稿や

初版本など展示しているが、偉大な詩人の足跡にしては情報が少なく埋もれている印象がありもったいない。

さてさて夕暮れてきたので帰路につく。学校の校門に二宮金次郎の像を見つけ、町中の学校にはめずらしいと思ったら二宮尊徳も小田原生まれだという。そうかそうか、とうなずきながら、その日歩き回った万歩計の数字は3万近くを示していた。健脚一直線の散歩路である。

（財団 江沢 記）

○川崎大師の鈴を切る音

<http://www.youtube.com/watch?v=jrnMYhwy7EQ>

○川崎大師の風鈴市の音

<http://blogs.yahoo.co.jp/ez10x12th/3889228.html>

○風鈴の音

http://oto.temiruya.com/archives/2008/06/post_82.html